

## これからの耐震技術／減災技術 ～全国的な取り組み～

2026（令和8）年6月19日（金） 13:30～17:00（開場13:00）

会場：名古屋大学減災館1階減災ホール・オンライン

近代から現代への過渡期に現れた鉄筋コンクリート構造物と鉄骨構造物は、この100年余りで急激な発展を遂げ、街並みを一変させました。部材が一定の力を保持して曲がりつづける「粘り」を巧みに利用する靱性型の設計法が、それ以前の弾性設計に比べ、耐震性を大幅に向上させることが1995年の兵庫県南部地震において実証されました。これにより超高層ビルも盛んに建設されました。このような設計体系が普及した結果、地震後の損傷、機能損失によって使用が困難となり事業停止が長期にわたる問題では、内外装材、設備機器等の非構造部分の被害が要因となることが指摘されています。技術的知見が相対的に少なかった時代において、先達は高度な工学判断を用いて、我が国の都市を形成する多様なインフラを世に送り出してきました。今後は現在の科学的知見を十分に利用することで、将来起こり得る各種地震に対するインフラの損傷状況を具体的に評価し、事前に構造物の耐震対策を進めるとともに、被災地域における救助・救援活動や復旧対応を遅延なく進めるための災害対応を見据えた取組が求められます。旧式設計による脆く崩れる構造物は社会にはまだ残されていることから、これら一定量避けられない被害に対して、被災地域における救助・救援活動や復旧対応を迅速に進めるために、デジタルを活用した最新の災害対応を可能とする技術やその普及も求められます。これからは、より包括的な情報に基づき、被害を効率的に軽減し、かつ早期の復興を実現する新たな技術に対する研究開発はますます重要となります。こうした背景のもと、本シンポジウムでは、関連の分野をリードする公的な研究機関が取り組む、広く社会を見た研究開発による地震防災の進展、また、連携の場の創出による社会貢献の可能性を議論します。

■プログラム 13:30-13:40 趣旨説明 鷲谷 威（減災連携研究センター センター長・教授）

### 第1部 講演

13:40-14:10 「耐震工学の歴史と現状」

長江 拓也（減災連携研究センター 研究連携領域 准教授）

14:10-14:40 「衛星情報を活用した建築物の構造ヘルスマモニタリング技術の現状」

向井 智久（国土交通省国土技術政策総合研究所 構造基準研究室 室長）

14:40-15:10 「地震防災に資する科学技術に基づく研究開発」

田端 憲太郎（国立研究開発法人防災科学技術研究所 上席研究員／都市空間耐災工学研究領域 研究領域長代理／兵庫耐震工学研究センター 副センター長）

15:10-15:40 「地震後の係留施設の利用可否判断と現在の取り組み」

大矢 陽介（国立研究開発法人海上・港湾・航空技術研究所 港湾空港技術研究所 地震防災研究領域 耐震構造研究グループ グループ長）

15:40-16:10 「ソウルの地震リスクと簡易耐震性能の評価方法の構築」

姜 在道（ソウル研究院 インフラ技術研究室 主任研究員）

16:10-16:15 休憩

### 第2部 パネルディスカッション

16:15-16:55 パネルディスカッション

パネリスト：向井、田端、大矢、姜

司会：長江

16:55-17:00 まとめ 富田 孝史（減災連携研究センター 副センター長・教授）

■開催形式：現地参加 + zoom ウェビナー（オンライン）

■参加費：無料

■申込方法：下記 URL または QR コードよりお申込みください。  
ご登録のメールアドレス宛に参加方法をご案内します。

■申込 URL: <https://forms.gle/NzUrUSDLC8adFNWd8>

■申込期限：2026年6月18日（木）正午まで（期限後は受付できかねます。お早目にお申込ください。）

主催：名古屋大学減災連携研究センター 問い合わせ：減災連携研究センター広報グループ

MAIL: [inquiry-academy@gensai.nagoya-u.ac.jp](mailto:inquiry-academy@gensai.nagoya-u.ac.jp)

<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/?p=31581>

